

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：12401

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K21718

研究課題名（和文）語り・身体・イメージの連関と変容の学際的研究 エスノメディアロジーの構築

研究課題名（英文）Constructing ethno-medialogy: Interdisciplinary investigations of correlations and transformations of narrative, embodiment and imagery

研究代表者

山崎 敬一（Yamazaki, Keiichi）

埼玉大学・人文社会科学部研究科・名誉教授

研究者番号：80191261

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、語り・イメージ・身体に関する歴史学的、社会学的研究とテクノロジー（メディアやロボット）と人間の相互行為との関係に関する社会学と情報工学的の文理融合研究を行った。

本研究では、萌芽プロジェクト研究会を開催しての、語り・イメージ・身体に関する研究報告の発表と議論の深化、及びそれを受けての報告の論文化、店員ロボットを用いての顧客との実験、及びそれに基づく人間とロボットの相互行為の分析と論文発表。遠隔テクノロジーを用いての遠隔の人と現場にいる人の相互行為の分析と論文発表、テクノロジーと人間の関係に関する国際シンポジウムの開催、という3つの方法で研究成果を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、語り（語られることばや概念）とイメージ（画像・映像）と身体がどのように関連しているのか、また文化的社会的変動によってその連関がどのように変容するのか、さらに語りとイメージと身体をつなぐメディアの変容やロボットや遠隔テクノロジーの利用が、人間との相互行為にいかなる変化をもたらすかを歴史学・社会学・メディア研究・情報工学の共同研究として明らかにした点である。

また本研究の社会的意義は、新型コロナウイルスの流行とともにその利用が広がり始めた遠隔テクノロジーやロボットテクノロジーが、人間との相互行為にどのような影響を与えるのかを明らかにした点である。

研究成果の概要（英文）：In this project, we presented our research findings in the following two ways. (1) Conducting historical and sociological research on the relationship between narratives, images, and the body. (2) an interdisciplinary study of sociology and information engineering on the relationship between technology (media and robots) and human interaction. Specifically, (1) Publishing research article by presenting their research, discussing with researchers, then deepening the ideas on narratives, images, and the body at our Exploratory Research workshops, (2) Publishing the papers (i)by conducting experiments between customers and a clerk robot and analyzing human-robot interactions of these experiments, ()by analyzing remote interactions which using remote technology between local and remote persons. (3) Organizing international symposiums on relationships on technology and human.

研究分野：社会学、エスノメソドロジー

キーワード：エスノメソドロジー ヒューマンロボットインタラクション メディア分析 言説とイメージの関係 相互行為分析 言説と身体

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

語りと身体とイメージの関係に関する社会学者や歴史学者の関心が高まっていた。さらに、メディア研究者やロボット研究者の間で、メディアやロボットを用いての身体的相互行為と対面での人間どうしの身体的相互行為の違いについて関心が集まっていた。

2. 研究の目的

本研究は、「語り・イメージ・身体の関係やそのメディアの変容との関係を研究する歴史学者・社会学者」と「テクノロジー(メディアやロボット)と人間の相互行為との関係に関心をもつ情報工学研究者」の共同研究である。本研究の目的は、語り(語られることばや概念)とイメージ(画像・映像)と身体がどのように連関しているのか、また文化的社会的変動によってその連関がどのように変容するのか、さらに語りとイメージと身体をつなぐメディアの変容やロボットや遠隔テクノロジーの利用が、人間との相互行為にいかなる変化をもたらすかを明らかにすることである。

本研究では、語り・イメージ・身体に関する歴史学的、社会学的研究、テクノロジー(メディアやロボット)と人間の相互行為との関係に関する社会学と情報工学的の文理融合研究の2つの研究を社会学者、歴史学者、メディア学者、ロボット研究者の共同研究としておこなった。

3. 研究の方法

歴史学、社会学、メディア論の分野で、語り・イメージ・身体の関係についての研究を行うとともに、「萌芽プロジェクト研究会」を開催し、研究発表と議論を行い、研究成果を共有した。またテクノロジーと人間の相互行為の研究では、代表者の山崎敬一、分担の中西英之、山崎晶子が店員ロボットを用いて実際の店舗で実験を行い、ロボットが顧客とどのような相互行為を行うかを分析した。また代表者の山崎敬一、分担の小林貴訓、山崎晶子を中心に、遠隔テクノロジーを用いた遠隔の人と現地の人による遠隔共同買い物実験を埼玉大学構内や大手スーパーで実施した。さらにSF作家や研究者を招いて2つの国際シンポジウムを開催し、テクノロジーと人間の関係について議論をした。

4. 研究成果

本研究では、代表者(二重線)、分担者(下線)、研究協力者(研究支援者)(波線)が、分担してそれぞれの研究を行うとともに、萌芽プロジェクト研究会で研究成果を発表し、互いの成果を共有するとともに、語り、身体、イメージの関係についての議論を深めることを試みた。またロボット店員や遠隔テクノロジーを用いた買い物実験を行い、テクノロジーと人間の相互行為との関係をあきらかにした。またテクノロジーと人間に関するオンラインでの国際シンポジウムを主催した。

ここでは、国際シンポジウムと萌芽プロジェクト研究会とについて述べた後、本研究の成果である主要論文について詳述する。

(1) 国際シンポジウム

2019年10月13日(日)に「Sai-Fi: Science and Fiction: SFの想像力×科学技術」と

いうシンポジウムを埼玉大学教養学部と共同開催し、中国の著名な SF 作家である劉慈欣氏や、日本の科学ジャーナリスト・SF 作家である藤崎慎吾氏らを招待し、筑波大学の澤博隆助教や、上田早夕里氏をはじめとする日本の SF 作家や研究者とともに、科学技術と人間の関係について議論を行なった。このシンポジウムは日経サイエンスの記事（大澤博隆、劉慈欣『特集『三体』の科学「作者劉慈欣が語る SF と科学技術」日経サイエンス 2020 年 3 月号）として発表した。

パンデミック時代における語りとメディアと科学技術の関係について国際シンポジウム「パンデミック時代における科学技術と想像力」（2021 年 3 月 27 日、2021 年 3 月 28 日）を行い、第一日目は、SF 作家の長谷敏司氏、作家の一田和樹氏、経済学者の井上智洋駒澤大学准教授、金井郁埼玉大学教授、第二日目は、沼野充義名古屋外国語大学副学長・東京大学名誉教授、作家・翻訳家の立原透耶氏、安西祐一郎日本学術振興会顧問・元中央教育審議会会長、暦本純一東京大学教授、村上祐子立教大学教授の諸氏を招聘し、議論を行った。シンポジウムは英語の同時通訳をつけて国際発信した。第一日目の議論では、パンデミック時代においてインターネット技術や人工知能(AI)等の情報技術がもたらす社会的分断の問題やその解決策について議論を行った。第二日目の議論では、新しい科学技術や想像力のもたらす未来の可能性について議論を行った。本研究のテーマである、情報テクノロジーと人間の相互行為の関係や、新しい情報メディアのもたらす社会的影響についても有効な示唆を得た。

(2) 萌芽プロジェクト研究会

2020 年 2 月 27 日に、埼玉大学で第 1 回萌芽研究プロジェクト研究会を開催し、研究代表者の山崎敬一によるプロジェクト紹介のあと、戦争、イメージ、ミュージアムをテーマに研究分担者の一ノ瀬俊也（埼玉大学人文社会科学部准教授）と東洋大学非常勤講師（当時）の清水亮氏が発表を行った。

2022 年 1 月 28 日（金）にオンラインで第 2 回萌芽プロジェクト研究会を開催し、3 つの研究発表を行った。この報告については次の主要な研究成果のところで詳述する。

(3) 主要な研究成果論文と要旨

ここでは、第 2 回萌芽プロジェクト研究会報告をもとに論文化された 3 つの研究について詳述する。またロボットや遠隔テクノロジーと人間の相互行為の関係の研究の 2 つの論文について詳述する。

宮崎悠二（研究協力者、埼玉大学科研費研究支援者）「いかにしてテレビを批判できるのか 大宅壮一「一億総白痴化」論のテキスト実践の分析」

テレビ放送黎明期においてテレビのイメージを方向付けた「一億総白痴化」論のテキストを対象にして、特定の番組に対する批判を社会批判としてテキスト上で組織化する方法の分析を報告した。大宅は「一億総白痴化」論のテキストにおいて、民衆・文化・メディア技術について序列化する、左記序列に基づいた連動関係を想定する、テレビ番組の低俗化を「日本の風潮」の現れとして解釈する、以上の方法によって批判を行っていた。同報告については、「批判」をどのように理解可能なものとして提示するのか、そのやり方にカテゴリーカルな規範性や一般化可能性はどのようにかわるのかといった、より一般的な研究の方向性があることや、「実証的なデータに基づいた批判」とは異なる水準での「もっともらしさ」が示されることとテレビへの「イメージ」との関係について議論された。

（第 2 回萌芽プロジェクト研究会報告、この報告は、宮崎悠二「いかにしてテレビを批判することができるのか：大宅壮一による「一億総白痴化」論のテキスト実践の分析」『年報社会学論集』

佐藤雅浩(埼玉大学人文社科学研究科准教授)

「大衆的な精神疾患言説の変容に見る近代日本の精神・身体・社会イメージ」。

本報告では、近代日本で広く普及した精神疾患に関する諸概念(とくに診断名)を分析対象として、各時代に共有されてきたと思われる人々の「精神」と「身体」ならびに「社会」の集合的イメージを描き出そうと試みた。1900年代~40年代の「神経衰弱」と「ヒステリー」、1950~80年代の「ノイローゼ/神経症」言説、1980年代後半以降の「PTSD/トラウマ」、1990年代後半以降の「うつ病」および「発達障害/自閉症」言説を分析した結果、それぞれの言説においては、「精神」「身体」「社会」という各要素について強調点の違いがあること、またこれら3要素の因果的な関連についても異なる理解が存在していることが明らかになった。全体として、精神医学の言説は常に「社会」を病因として精神疾患の発生を語る傾向にあるが、1990年代以降の言説では、「社会」を形成する主体としての人間という視座が弱く、自身の行為とは無関連に創造された社会問題によって、個人が被害を受けるというイメージで通底している。これは現代社会における集合的な「社会」イメージの変容と関連している可能性が示唆された。

(第2回萌芽プロジェクト研究会報告、この報告の一部は、佐藤雅浩「精神疾患の流行に関する社会学的研究(3)」埼玉大学紀要(教養学部) 58(1) 45-66 2022年9月として刊行された。)

是永論(研究分担者、立教大学・社会学部・教授・小川豊武(研究分担者、昭和女子大学・人間社会学部・講師)「つながり孤独」を意味づける 若者とSNSの問題を対話型ネットワークがどのように定式化するか」

本報告では、報道番組の中で問題提起された、若者における「つながり孤独」をトピックに、近年のデジタル技術の普及に基づきながら展開している「参加型ジャーナリズム」として、ジャーナリストと一般市民が共同に参加して制作するニュース(番組)の中で、トピックが一般の人々が関わる「問題」としてどのように理解されるのかについて明らかにした。同時にその理解過程において、「つながっているのに孤独」という理解の困難から、番組に関わる参加者の間で異なった“理解のバージョン”(Cuff, 1993)が展開するのに対して、そのバージョンの違いをどのような交渉において統合に導くのかを、参加者どうしが形成する「対話的ネットワーク」(Leudar & Nekvapil, 2004)および「成員カテゴリー化装置」(Sacks, 1972)への参照を焦点に分析した。

引用文献

Cuff, E. 1993. Problems of Versions in Everyday Situations. Washington: University Press of America.

Leudar, I. and Nekvapil, J. 2004. “Media dialogical networks and political argumentation”, Journal of Language and Politics, 3(2): 247-266.

Sacks, H. 1972. “An Initial Investigation of the usability of conversational data for doing sociology”, in Sudnow, D. (ed.) Studies in Social Interaction, New York: The Free Press: 31-73.

(第2回萌芽プロジェクト研究会報告。この報告の一部は、Korenaga, R. and T. Ogawa, “Everyone has it, everyone uses it”: The emergence of “publicness” through multiplication in dialogical network”, Discourse, Context and Media, vol.51, pp.1-8 として刊行された)

Iwasaki Masaya, Ogawa Kosuke, Yamazaki Akiko, Yamazaki Keiichi, Miyazaki Yuji, Kawamura Tatsuyuki, Nakanishi Hideyuki “Enabling Shared Attention with Customers Strengthens a Sales Robot’s Social Presence” HAI2022, 176-184, 2022.

京都の観光客の多い土産物店で店員ロボットを用いた接客実験を行った。従来、店員ロボットを用いた接客においては、店員ロボットが顧客に語りかけても顧客に無視されてしまうという

社会的存在感の無さが指摘されてきた。この論文では、顧客に対して店員ロボットが共同注意を作り上げることで、社会的存在感が増すことを実際の店舗における実験において示した。

小松由和、山崎晶子、山崎敬一、池田佳子、歌田夢香、久野義徳、小林貴訓、福田悠人、「遠隔買い物支援における複数視点と音声の位置」, 情報処理学会論文誌. Vol.60. no.1, pp.157-165, 2019.

遠隔買い物支援においては、買い物の対象(商品)だけでなく、買い物をする人や周りの人(同伴者や店員)が商品に対してどのように身体的に志向しているかを示すためのカメラ映像(文脈視点カメラ)が重要である。しかし、実際の店舗やスーパーにおいては、文脈視点カメラからの映像では買い物する人や周りの人の身体が邪魔をして、商品自体が見えなくなることが度々あった。ここでは、音声を文脈視点カメラからだすことにより、買い物する人や周りの人が遠隔にいる人の存在感を感じ取り、文脈視点カメラから商品が見えるよう自然に身体の配置を変えることがわかった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計25件（うち査読付論文 15件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 宮崎悠二	4. 巻 No.35
2. 論文標題 いかにしてテレビを批判することができるのか：大宅壮一による「一億総白痴化」論のテキスト実践の分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『年報社会学論集』	6. 最初と最後の頁 pp.69-79.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤雅浩	4. 巻 58(1)
2. 論文標題 精神疾患の流行に関する社会学的研究(3)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 埼玉大学紀要（教養学部）	6. 最初と最後の頁 45-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Korenaga Ron, Ogawa Tom	4. 巻 51
2. 論文標題 “Everyone has it, everyone uses it”: The emergence of “publicness” through multiplication in dialogical networks	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Discourse, Context and Media	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.dcm.2022.100657	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Iwasaki Masaya, Ogawa Kosuke, Yamazaki Akiko, Yamazaki Keiichi, Miyazaki Yuji, Kawamura Tatsuyuki, Nakanishi Hideyuki	4. 巻 -
2. 論文標題 Enabling Shared Attention with Customers Strengthens a Sales Robot's Social Presence	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 HAI2022	6. 最初と最後の頁 176-184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1145/3527188.3561918	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小松由和、山崎晶子、山崎敬一、池田佳子、歌田夢香、久野義徳、小林貴訓、福田悠人、	4. 巻 Vol.60. no.1
2. 論文標題 遠隔買い物支援における複数視点と音声の位置	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 情報処理学会論文誌	6. 最初と最後の頁 157-165
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計25件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 9件)

1. 発表者名 是永論・小川豊武
2. 発表標題 「つながり孤独」を意味づける 若者とSNSの問題を対話型ネットワークがどのように定式化するか
3. 学会等名 埼玉大学挑戦的萌芽研究研究会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計7件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	池田 佳子 (Ikeda Keiko) (90447847)	関西大学・国際部・教授 (34416)	
研究分担者	小林 貴訓 (Kobayashi Yoshinori) (20466692)	埼玉大学・理工学研究科・教授 (12401)	
研究分担者	山崎 晶子 (Yamazak Akiko) (00325896)	東京工科大学・メディア学部・准教授 (32692)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	辻 絵理子 (Tsuji Eriko) (40727781)	埼玉大学・人文社会科学研究科・准教授 (12401)	
研究分担者	佐藤 雅浩 (Sato Masahiro) (50708328)	埼玉大学・人文社会科学研究科・准教授 (12401)	
研究分担者	一ノ瀬 俊也 (Ichinose Toshiya) (80311132)	埼玉大学・人文社会科学研究科・教授 (12401)	
研究分担者	是永 論 (Korenafa Ron) (50275468)	立教大学・社会学部・教授 (32686)	
研究分担者	小川 豊武 (Ogawa Tom) (80796079)	昭和女子大学・人間社会学部・講師 (32623)	
研究分担者	中西 英之 (Nakanishi Hideyuki) (70335206)	大阪大学・工学研究科・准教授 (14401)	
研究分担者	小林 亜子 (Kobayashi Ako) (90225491)	埼玉大学・人文社会科学研究科・教授 (12401)	
研究分担者	久野 義徳 (Kuno Yoshinori) (10252595)	埼玉大学・理工学研究科・名誉教授 (12401)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	宮崎 悠二 (Miyazaki Yuji)	埼玉大学・人文社会科学研究科・研究支援者 (12401)	
研究協力者	陳 海茵 (Chen Haiyin)	埼玉大学・人文社会科学研究科・研究支援者 (12401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 パンデミック時代における科学技術と想像力	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 Sai-Fi : Science and Fiction: S Fの想像力×科学技術	開催年 2019年～2020年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関